

教育委員会

コラム Vol.29

教育長室の窓から

ニホンザルの話



突然、「ニホンザル」で恐縮ですが、ある本に、京都大学名誉教授の今西錦司先生の研究が紹介されていました。ご存じのように今西先生は、ニホンザル研究の第一人者です。今西先生を中心とした研究グループが、ニホンザルの学習方法には二つの形があることを明らかにしたそうです。

まず「状況学習」です。集団の中で生きていくには、その集団の価値・規範（ルール）を身に付けることが不可欠です。ニホンザルの社会にも価値・規範があって、それは状況学習によって身に付けられることが分かったそうです。例えば、目の前にミカンがあっても、ミカンを取ってよい時とわるい時があります。母親ザルは子ザルがボスザルの前にあるミカンを取ろうとすると、子ザルのしっぽをつかんだり、子ザルを遠くに追いやってミカンを取るのを阻止するそうです。そうしないと、子ザルはボスザルに噛みつかれいじめられることを母親ザルは知っているからです。母親ザルは、こうした状況学習によって子ザルに集団の掟を教えていくそうです。もし、しつけの悪い母親ザルに育てられたら、子ザルは集団のルールを学べず、群れから追放されます。

次は「試行錯誤」です。トライし、エラーを繰り返しながら、智慧を獲得していく方法です。餌付けをする中で一匹の若いメスザルが、砂のついたサツマイモを海水で洗って食べるようになったそうです。やがて、群れの仲間も同じ行動を取るようになり、上の世代へも、そして下の世代にも広がりました。さらに、砂浜に蒔かれた小麦を砂ごと掴み、海水で掬って食べるサルまで出てきたそうです。これは、まさに物事をセオリーだけで進めるのではなく、試行錯誤をしながら経験則を生み出していく学習方法です。

このニホンザルの学習方法は、私たち（子どもたち）が、学ぶとき（学校での学習、社会のルールなど）に共通することかと思います。このニホンザルの学習方法は、ほんの一例ですが、私自身が、「はっ」とさせられましたので取り上げてみました。さらに、セオリーは無視できませんが、それに縛られずに、新しいことにチャレンジすることも大切です。本町の小中義務教育学校のチャレンジにご期待下さい。

教育長の

ちょっといい話

引き継がれる名言・格言



名言・格言というと、古今東西の偉人などの言葉が思い当たります。

例えば「人間は考える葦である」（哲学者のパスカル）「元気を出しなさい。今日の失敗は、明日の成功の土台となるのだから」（教育家のケラー）

ところで、過日、10年来の知り合いから一冊の冊子が届きました。偉人とは言えませんが、日本の教育者の語録集をまとめたものでした。

「一番やりやすい無償の行為は紙屑拾いでしょうね。少なくともわたくしの場合にはそうです。つまり紙屑拾いだけはだれからもホメられもせず報いられもしないものだからです」

「単に教科の内容を教えるだけでも、実に容易ならざる準備と研究を要するわけですから、さらに、教育の眼目である相手の魂に火をつけて一人の人間の魂を目覚めさすということは、実に至難中の至難事です」「教育の核心は、結局は人の生き方のタネ蒔きをすることの他ありません」

私も長年、教育に携わってきましたが、あらためて自分を振り返ることができました。身近には、まだまだ素晴らしい方々が多くおり学ぶべきことが多くあります。